

所沢の伝説「鼠薬師」

はじめに

一三三三年（元弘三年）、後醍醐天皇のもと新田義貞や足利尊氏らによって、鎌倉幕府を支配していた北条氏が滅亡した。北条氏滅亡後、後醍醐天皇と足利尊氏は対立した。そして、後醍醐天皇についた新田義貞と、足利尊氏の争いは武蔵野を舞台に数々の争いが繰り広げられて行った。

一三三八年新田義貞がこの世を去った（三七歳）後、一三五二年（正平七年）、義貞の子義宗（三男・二〇歳）と義興（次男・二一歳）は後醍醐天皇の皇子宗良親王を擁して挙兵し、父親の義貞が義顕（長子）と共にいち早く鎌倉攻めを行い軍功を立てた、その二〇年後に今度は義貞の二人の息子たちが足利尊氏を滅ぼすべく鎌倉街道を南下して行った。何という因果だろうか。この進撃は一時鎌倉まで達し、足利尊氏を窮地に陥れたが、尊氏軍も直ちに反撃を開始すると、鎌倉街道沿いを北上しながら、次々と義宗軍を打ち破って行った。そして、この武蔵野台地での最後の戦いの舞台となったのが笛吹峠（埼玉県鳩山町と嵐山町の境目の峠）だった。足利尊氏軍八万人に対して義宗軍は二万人と勢力差は歴然であった。義宗は戦いに敗れ、武蔵野国所沢の薬王寺に逃れて再起を計っていたが、その機会は訪れなかったとの話が残っている、やがて出家して、「戦死した一族郎党の菩提を弔いながら、この地で亡くなったと、所沢の伝説「鼠薬師」の話の中で語られている。」「鼠薬師」という言い伝えは義宗の死後に突然現れた鼠の群れの不可思議な行動・怨念の話であった。戦死した新田軍勢の怨霊ではないかとも噂された。

いつの世も武士たちの権力争いで、家屋も畑も荒らされ僅かな食べ物さえも奪われて被害を蒙って来たのは、紛れもなく無力な百姓達庶民であった。だが、どんな時代も村人同士がお互いに協力し合い知恵を出し合って困難を乗り越えて来たのであった。

ここに、先人たちによって語り継がれてきた、故郷所沢の伝説「鼠薬師」を、私達「民話の会」が語ってみようと思う。

鼠薬師（ねずみやくし）

2

新田義宗の戦い（葛藤）！

時は、鎌倉時代から室町時代へと移り代わるころの、武家社会の権力争いの話である。

一三三六年に室町幕府が成立した。

実権を握った足利尊氏の幕府に不満を持っていた領主がたくさんいた。そんな足利政権に対し、新田義貞などの領主軍団は幕府の主権をめぐるの戦いを繰り返していた。

父の義貞（一三三八年没・三七歳）亡き後を継いだ三男

よしむね

よしおき

義宗は兄の義興（次男）と共に、一三五二年に上野国（群

こうずけのくに

馬県太田市）で拳兵し武蔵野の各地で足利軍と激しい戦いを繰り返した。

しかし、新田軍は幾度の戦いでも劣勢になり足利勢の追撃に会いながら小手指ヶ原や入間河原などでも多くの兵を失ってしまった。

義宗は、

「無念じゃが、多くの大切な兵を失ってしまった。

体制を立て直さねばならぬ。これ以上戦いを続けるわけに

しつよう

つごびぎ

はいかぬ。」足利軍は執拗に追撃してくるであろう、

新田軍の兵をひとり残らず討ち取ろうとしてくるに違いない。」

義宗はどうとう最後の決断をした。

疲弊ひんぱいした武将や兵のまえで、張り詰めた声で胸の内を明かした。

「無念だが、こうなっては仕方がない。しばらくは隠れて、好機がくるのを待つとしようぞ。」

「ま、まことに無念です… 殿！ 殿！」

と、家臣どもは青ざめた顔で声を押し殺おころして言った。

「必ずや好機が来るであろうぞ。その時を待つのだ」

と義宗は己を戒いましめるように言った。

家臣たちは、殿を取り囲むようにして呼びあった。

「そうぞ、そうぞ、きっとその日は来る！ 心せよ！」

「おう、おう！」

義宗は家来に向かってこう告げた。

「お前たちは一旦、上州じょうしゅうに、ひきあげてくれ！」

「わしはこの武蔵野の薬王寺やくおうじ（曹洞宗・所沢市有楽町）に身を隠し、敵の動向どうこうを探ろうぞ」

「しかし、殿ひとりの御身おんみに、いかなることが起こるやもしれませぬ」

「なに、心配せんでもよい！」

「わしによい考えがある。敵をあざむくのだ」

「え？ と申しますと」

「新田軍は散り散りになり、義宗は、とうとう北の国へ逃げて帰ったと、うわさを立てるのじゃ、よいか！

言いふらしてくれ。それを聞けば、足利勢もわしらを捜さなくなるだろう！」

「なるほど、御意おんご！ 仰せおおの通りです。

それはいい考えです！…」

義宗は家来たちを上州に引き上げさせ、自分はひとりで、この所沢の薬王寺と、小さな庵いおひとに隠れ住んだのだった。しかしながら、その後の戦況はと言えば…。

足利軍の勢力はますます強大になって行った。

そして、

一三三六年、室町幕府むろまちばくふの成立とともに、

足利尊氏は権力をにぎり、世は治まったかに見えてきたのだった。

義宗の覚悟！

5

さすがの義宗も、

「こうなつては長い間の念願を叶えることは、無理であるう！」

「たとえ足利勢に戦いを挑んでも、また多くの兵を失うばかりであろう。無念ではあるが、あきらめるしかない。」と、ひとり庵いおりで座禅を組みながら心を静めていた。

それから数日後の夜の庵いおりに、

予かねてから己の意志を伝えていた主な家臣を集めて、こう告げたのだった。

「今のいままで共に戦い…、必ずや再起を計ると誓った家臣たちには、まっこと相あいすまない…。」と、言うつと、

おもむろに

髪を落としたのだ。

「殿！」

覚悟のほどを知らされてはいたものの、現前げんぜんで行われた決意のほどを目の当またりにして誰も言葉はなかった。

家臣たちは、頭こうぐを垂れて涙をこらえ、そして嗚咽おえつした。
庵いおりの中は何とも言えないほどの静けさに包つつまれていた。

今まで隠れ家としていた庵いおりをお堂どうに造り換えた。

ある夜よのこと、

白装束姿しろしやうぞくの義宗は、煌々こうこうと輝きだした月の明かりを身に
受けながらしばらくの間物思いに耽ふけっていた。

それから、静かに大刀だいたうを抜くと、徐やおら

「ええい！」

と、邪念じゃねんを払うかのように上段じやうだんから振り下ろした（義宗
は、これ以降大刀だいたうを手てにすることは無かったと言われている）。

そして、正座せいざをすると短刀たんとうを抜き、丸い白木やいばに刃やいばを当て
始めたのだった。

側そばにひかえた者は、殿いっきよしゆの一挙手を見つめながら、
ただただ手を合わせていた。

白木しらぎの小さな仏像が、いよいよ出来あがった。

義宗は薬王寺の和尚おしょうに予てから己の考えを伝えていた。

「彫りあがったあかつきには仏像を御本尊ほんぞんの薬師如来やくしにょらいの腹中ふくちゆうに納めて欲しい」と、強く願っていたのだ。

そして、願いが叶うと

「願わくば一族子孫いちぞくしそんの中からこの無念むねんを晴らしてくれる者が、ぜひとも現れてくれることを望むのぞ…。」

と、何度も何度も唱え祈願きがんするのだった。

その後の義宗は、静かに平穏な日々を送りながら、

戦死した一族や家臣たちの菩提ぼだいを弔いながら余生よせいを送った。ということであった。

義宗よしむね三七歳没奇くしくも亡き父義貞よしさだと同年であった。

ネズミの出現（戦場に散った新田一族の怨念？）

8

義宗が亡くなってから幾年か経ってからのことだった。

奇妙なことが起こったのだ。

どうしたわけか、武蔵野一帯の村々に、ものすごい数のネズミが突然現れたのだ。

どこの家でも、大事に蓄えていた麦や芋などの他、蚕・

繭などもネズミに食い荒らされてしまった。

さらに、畑に植えてある物まで食い散らされた。

その被害はものすごく、農家は勿論、どこの家でも大変困ってしまった。

長老たちは集まって、しきりに頭を傾げながら

「尋常ではないぞ！」

と、突然降って湧いたようにネズミの群れが小手指ヶ原に現れたことが誰にも解らなかった…。

「こんなことは初めてぞ」

被害にあった村の衆しゅうは、

「なあおめえたち、これはどうしたことだろう、どうしたらよかんべえ？」

「早く手を打たねば食うもんもなくなっちまうぞ」

「そうだ！ ネズミにあ、猫を飼うのがいちばんじゃねえかあ？」

「バカ言ったらあ、あれだけの数のネズミにやあ、どんだけの猫を飼ったらいいもんかあ…、猫も逃げてくわあ…」

「ネズミ捕りの罾わなだ！ 罾しかを仕掛けてみんべえ」

と、あれやこれやと言いだしたもののどうしていいか分からなかったのだった。

日増しに被害は広まっていった。

村の衆から相談を受けた長老たちは、皆の前でこう言い放ったのだ。

「これは大変なこったぞ！ こりやあきつと念願ねんがんがかなえられないままに戦死した新田一族にいぢいちぞくや家臣たかたちの祟りたたりかも知んねえぞ?!」

「えーっ…、

そう言われてみれば、その頃の戦いの場はいつもこの武蔵野辺りだったというからなあ…。」

「そうかく！ ネズミのよくでる場所は、夜中の小手指ヶ原の辺りだ」

「白旗塚しらはたづかにネズミが集まっていただ！」

「古戦場を横切る鎌倉街道を南の方に、ネズミが群れをなして走つて行ったぞ！」

「おら見ただ！ 月夜の晩のネズミの群れの目が光ってた
だあ、泣き声が気味わることだ！」

「恐ろしかった、腰が抜けそうだっただ！」

「霊恨れいこんがネズミに化けて、この辺りをさまよっているのか
も知んねえなあ」

「おおーおっかねえ、身ぶるいがすらあ…。」

などと、話が終るのをまたずに、手で遮かきこるようにながらわれもわれもと、恐ろしいネズミの群れの話ばかりした。

義宗公の守り本尊

11.

農民たちは何日間も、夕方になると直ぐに戸締りをして、
囲炉裏に火を熾おこして家族皆が集まって夜の明けけるのをた
だ待っているのだった。

長老たちも何日も集まって頭を抱えて悩んでいたが、

村一番の物知りのおクメ婆さんが訪たずねて来て言う事に
や、

「薬王寺のご本尊は薬師如来だんべえ。義宗公の
守り本尊だんべえ。お願いすればいいべよ〜の〜」

「そうか！ おクメ婆さんの言う通りだ！ なんて

気付きづかなんだか！」

早速、薬王寺の和尚おしやうさんに相談しようぞ！ みんなで薬

師様に御願いしようぞ」

「そうすべー、そうすんべー、」

その話を聞いた村人たちは、

藁わらをもつかむ思いで、早速、長老たちを先頭にして薬王寺
にお参りに行ったんだ。

百姓たちのお経の声は夜中じゅう響いていたという話し
やった。

その日から皆で何日も薬王寺へ詣でてお経をあげたんだ。
そして月が開けた久しぶりに晴れわたった朝のことであ
った。

ふしぎな事に、お参りに訪れた人々の家では、ネズミの
被害を受けなかったのだ！

他の者らの家でも、ネズミの被害を免れたのだった。

この話は、瞬く間に村の人々に伝わった。

家々は何処も、かつてのように出入り口も裏戸も開け放
たれていた。

農家の童らや女っこや町の小僧こらの元気な声や笑顔が
戻ってきたのである。

おつかもおつとうも、みんな精を込めて忙しなく働い
ていた。

おクメばあさんが

「ありや、なんだったんべ〜！」

と腰をのばして口を開けて笑った。

真夜中のネズミの群れを見て、

腰を抜かしそうになったぞ、と話したゲンじいさんは、

小手指ヶ原の鎌倉街道の砂川堀すなかわぼりに架かる木橋か きばしを下りて牛にたらふく水を飲ませながら、

薬王寺の森に向かって手を合わせ「南無妙南無南無」

とお経とこなを唱えながら長いことおじぎをしていた。

それを見ていた街道を歩き交う町人らは、

立ち止まって汗を拭きふき道端に腰を下ろして、

そして、遠くの白い富士の山をながめながら煙管きせるに刻みきざみ

煙草たばこを詰めて一服し始めた。

鼻から「ふうー」と白いけむりを出した、

平和な、のどかな日であった。

鎌倉街道の道端の桜は葉桜はざくらになった。

この時分になると農民たちは忙しい時期である。

朝早くから家族総出で陸稲おかほの種時たねに精せいを出していた。

おクメ婆さんは、今日も

「薬王寺やくおうじにお参りしてきたよう」

と、笑顔で言った。

(間を置く)

いつのころからか、村の人たちは、薬王寺やくおうじの薬師如来やくしによらいを

「ねずみ薬師さま！」と呼ぶよようになっていた。

「ネズミから薬師やくしさまが村むらを救すくってくれた！」

と云う話は、

今でも、所沢の人たちによって大事に語られているということじゃ。

おわり